



つくばね vol.29 no.1

目次

- 1 日本語の書記法について
- 4 開学30周年記念特別企画「活字と歩んだ筑波大学の30年」
記者の取材奮闘記 ~「筑波大学新聞」編集室の舞台裏~
- 5 とびっくす
- 6 平成14年度附属図書館統計
- 7 本学教官寄贈著書紹介
- 8 私の一冊
- 9 Ask Us としょかんミニガイド
- 11 掲示板



日本語の書記法について

林 史典

分野による差はあるが、学術情報は概して急激に増加している。そして、その情報は大部分が文字情報である。高度情報化社会と言っても、それは記録や通信の技術革命によるものであって、情報そのものは大半が言語、それも学術情報については、ほとんどが文字言語によって記録・伝達される。蓋し、文字の発明は文明の進化にとってたいへん大きな意味を持っている。文字なくして大量の情報を効率的に記録・蓄蔵できず、記録・蓄蔵された情報を利用することなくしては科学技術の進歩もまたあり得ない。こじつけになるが、そういう見方から文字と書記法について少し書いてみたい。ただし、もとよりあまり複雑な議論には立ち入らない。

20年ほど前の統計を見ると、例えば、Chemical Abstracts(CAS)が対象としている論文の言語は、英語が1位で全体の56.9%、それにロシア語・ドイツ語が続き、日本語はフランス語(4.2%)に次いで5番目(4.1%)である。日本科学技術情

報センター(JICST)の論文抄録では、日本語(8.6%)とフランス語(4.4%)の順が逆になっているが、上位3言語の順位に異同はない。医学文献でも、ほぼ同様の分布を示すらしい。勿論、現在は英語の比率がもっとずっと大きくなっているにしても、日本語が先端的な学術情報を記録する数少ない言語の一つであることに変わりはない。ところが、その文字と書記法は他の主要な言語に比して全く異質である。

日本語の書記法は、ラテン文字を用いる英語・ドイツ語・フランス語、キリル文字を用いるロシア語などと異なり、表意文字と表音文字を組み合わせた一種の混合システム(mixed writing system)である。混合書記システムとは、異なる文字法や異なる文字体系を組み合わせることで、古代に例はあるが、近代的な書記法としてはきわめて珍しい。

混合書記システムと言っても、古代の表語文字が案出した方法と異なって、日本語では、中国語

から借用した漢字が表意機能を、その漢字を元にして作った仮名が表音機能を果たす。なぜ、こんな書記法が生まれたのか、その理由を3点に要約してみよう。

これまでに知られている言語の数はおよそ3000、それに対して文字の種類は、既に失われたものを含めても約400に過ぎないという。多くの言語は、借用によって文字を獲得したわけである。そこでまず第一に挙げるべきは、日本語の借用した文字が漢字という表語文字であったことであろう。文字は、総じて、漢字のような表語文字（単語文字）、仮名のような音節文字、ラテン文字のような音素文字（単音文字）に分けられるが、表語文字はそれを生んだ言語の語彙体系に密着している上に表音性に劣るから、それを借用した言語にとってはたいへん使いにくい。そういうところに、表語文字が表音文字に変化する理由の一つがある。エジプトのヒエログリフにしてもシュメルの楔形文字にしても、文字の起原は漢字と同じ表語文字であるが、借用は、表語文字が表音文字に変化したり、表音文字として進化する大きな契機になる。

借用した表語文字を用いて自らの言語を自由に書記し、書記されたものから意図された語形を確実に読み取ることができるシステムを作り上げるためには、どうしても表音的手段が必要である。そこで、日本語も漢字を表音文字化し、表音文字化した漢字を略体化して平仮名・片仮名という音節文字を完成させた。付言すれば、仮名のように純粋な音節文字は他に例が少ない。音素文字ではなくて、音節文字になったのには、日本語音の構造的・体系的特徴 日本語が一定した構造の限られた音節で成り立っていること が関係している。

日本語に音節文字が完成した時期を示すのは、次のような事実である。すなわち、音素文字や音節文字は一定の配列法を生み出す。ラテン文字の配列順（ABC順。言うまでもないが、「アルファベット」という名称はギリシャ文字の最初の2字の読み方に由来する）は、その原型が早くも紀

元前14世紀のウガリト文字表に見出せる。ラテン文字に次いで使用面積が広いアラビア文字は、配列法をウガリト文字と同じセム系のアラム文字から受け継いだ。8世紀に字形による整序を加え、現在はこれが使われている。日本にも伝わった悉曇文字の配列法には、古代インドの音韻学が反映されている。同様に、仮名も10世紀には独自の配列法を生んだ。「あめつち」で始まる48字の配列が最初で、その後「たみに」「いろは」が現れる。970年撰の源為憲『口遊（くちずさみ）』（本図書館の和装本書庫にも、古典保存会の複製がある）は、

大為尔伊天奈徒武和礼遠曾支美女須土安佐利
（於）比由久也末之呂乃字

知恵倍留古良毛波保世与衣不祢加計奴

（田居に出で 菜摘む我をぞ 君召すと 求食り

〔追〕ひ行く 山城の うち

酔へる子ら 藻葉干せよ え舟繫けぬ）

という配列（「アルファベット」と同じように、冒頭部を採って「たみに」と言う）を掲げた後、

今案世俗誦曰阿女都千保之曾里女之訛説也
此誦為勝

と述べているから、この頃はまだ「あめつち」が用いられ、「いろは」は出現していなかったらしい。「いろは」の初出は、承暦三年（1079）の『金光明最勝王経音義』（これも、同書庫に複製がある）である。

音節文字の生成とともに重視すべきは、漢文訓読法の発明であろう。訓読法とは、日本人なら誰もが習った漢文の読み下し方のことで、漢語に固有の日本語（和語）を当てはめ、あるいはそのまま字音で読んで助詞や助動詞を補い、日本語の語序に読み下す方法である。訓読は、日本語が漢文に接した極初期から行われていると推定されるが、その習慣が漢字に和語を結び付け その結果として「訓読み」を作り、訓読体という独特の文体を発生させた。日本語と同様、漢字を借用した朝鮮語やヴェトナム語に「訓読み」ができなかったのは、おそらく訓読が発達しなかったからである。日本人は、中国語を外国語としてではな

く、自国語として読んでしまうというこの奇抜なやり方で、中国文化を摂取した。

かくして、訓や仮名で固有の日本語を書き表し、それに漢語を交えた文を綴る方法、そして、あらゆるタイプの文字 表語文字（漢字）と音節文字（仮名）、時には音素文字（ラテン文字）までもを混用するはなはだ珍しい書記法が成立した。日本語の書記法が現在のシステムに至る歴史的過程については省かざるを得ないが、ただ、現在のような書記法が確立した時期が意外にも漸く前世紀の半ばである点については、簡単に触れておかなければならない。日本語の書記法に関して、最も発達が遅れたのは句読法（punctuation）である。読点（、）を付すことが一般化するのには明治時代の中頃、文末に句点（。）を付ける習慣が定着するのは昭和20年代からである。句点の浸透を遅らせたのは、統語上、述語が文末に位置する

ので、そこに現れる特定の形式 文法的形態やそれを表す文字 が自ずとその標識になったからである。清・濁も、近代に至るまで厳格に書き分けられていない。内容にわたる是非はともかく、漢字の使い方や仮名遣い、送り仮名などに一定の基準が設けられるのも、昭和20年を待たなければならなかった。

どんな書記法にもそれぞれの特徴があると考えべきであって、日本語の書記法に関して、軽々にその功罪・得失を断じるのは適切でない。しかし、その書記法が持つ優れた表語性と引き替えに、漢字という大きな文字体系と煩雑な規則・習慣を必要としながら、なおかつ正書法（orthography）が定まりきらないという代償を払い続けなければならないのは事実である。

（はやし・ちかふみ 文芸・言語学系教授 / 附属図書館長）

* 「口遊」〔1300・43, 1300・240, 1300・284, 1300・305,〕

** 「金光明最勝王経音義」〔1320・150〕

